ＫＯＢＥの本棚

－神戸ふるさと文庫だより－

第65号　　平成22年7月20日

編集・発行　**神戸市立中央図書館**

〒650-0017神戸市中央区楠町７－２－１(078)371-3351

宮城道雄生誕地の碑

宮城道雄と神戸

お正月になるとかならず聞こえてくる名曲「春の海」の作曲者・宮城道雄は、明治二十七年に神戸外国人居留地五十八番館の茶倉で生まれました。当時、父親は居留地内にある茶の貿易商に勤めており、道雄は幼少期を神戸で過ごしました。

開港以来、神戸では外国艦隊の軍楽隊や居留外国人のアマチュア演奏家が奏でる西洋の音楽を聴くことができました。特に居留地の中では、海岸通で定期的に楽隊の演奏会が行われるなど、西洋音楽を耳にする機会が多かったようです。後に道雄は、伝統を重んじながらも西洋音楽の手法を取り入れた楽曲を創作するなど、新しい日本音楽の世界を切り開いていきます。

彼は自著の中で次のように回想しています。「私は今考へて見ると、かうした外国の気分のあつた神戸の居留地で、西洋の音楽や、いろいろのことを見聞きしながら、九歳の頃まで育つたと云ふことが、自分の作曲や、芸の上に仕合せをしてゐるのではないかと思つてゐる」（『春の海』ダヴィッド社昭和三十一年より）

横山光輝「鉄人28号」の青春―若き日の素顔今ここに　山田幹雄（神戸市立須磨高等学校同窓会本書刊行委員会）

昨年ＪＲ新長田駅近くにできたモニュメントでおなじみの『鉄人28号』。作者の横山光輝は他にも『バビル２世』『魔法使いサリー』などの作品で知られる漫画家だ。本書は神戸市立須磨高校で同期生だった著者が、平成十六年に亡くなった横山の功績と、その思い出を集めまとめたもの。漫画に情熱を傾けた横山と、彼を支えた友人たちの青春記となっている。

住職がつづるとっておき須磨寺物語　小池弘三（四季社）

須磨観光協会会長でもある住職が、寺にまつわる文学と歴史、境内案内を四章にまとめた。大きめの活字とゆったりした行間、ルビが目にやさしい。

設備のバリアフリー化、境内に散在する「青葉の笛のキーボード」「からくり時計」などの「オモロイ」品々は、ひとりでも多くの人に来訪してもらいたいという願いから。「とっておき」の発見を期待したい一冊。

都市行政を歩いて　中川誠一郎

著者は、神戸市役所に三十六年間勤務した行政マン。

最初に配属された部署で、「しあわせの村」の基本構想・計画の作成に関わり、大学教員や厚生省を訪ねて意見を聞くなど、人との繋がりの中で仕事を進めていく。その姿勢は、別の部署に異動しても変わらない。困難な課題に真摯に、時に断固として取り組む姿に、行政マンとしての自負が滲む。

退職まで数年という時期、著者はガンを告知され、「いつもの見慣れた景色がなぜか懐かしく、別の世界に見える」と記す。

本書は、自ら歩んだ都市行政の現場を、そのような目で振り返って書かれた。

山田の里の野草花図鑑　小島敏克（山田の里グリーンクラブ）

山田の里は、北区の山の街から箕谷、谷上付近を中心とする一帯。近年、宅地化が進んでいるが、まだ自然が多く残る地域でもある。収録されている野草は、約二百種。名の由来などの解説とともに、野草の全体と細部がわかりやすく写真で紹介されている。小冊子ながら読むだけでも楽しい図鑑となっている。本書のほか、『山田の里の木の葉図鑑』や『山田の里のキノコ図鑑』も刊行されている。

運命の日―一九九五・一・一六　濱口隆義（リトル・ガリヴァー社）

大震災は三連休明けだった。偶然か必然か、その朝を神戸で迎えることになる人たちの、震災前日を描く短編小説集。旅行や帰省など、様々な事情が登場人物を神戸に向かわせ、逗留させる…。

十九の物語はすべて、朝を待たずに幕を下ろす。いつもならそれは、日常の一コマであったかもしれない。しかし読者は知っている、その後何が起きたのかを。抑制された筆致が、描かれなかった翌日の重みを見事に伝えている。

こうべ文学散歩　橘川真一監修　神戸新聞総合出版センター編・発行

神戸には『万葉集』『源氏物語』『平家物語』等の古典ゆかりの地が多くあり、また開港以来育まれた独自性がある。その一方で戦災や水害・震災といった災害も神戸の文学に大きな影響を与え、街や心の変貌を基調とした作品が多くみられる。

本書はそのような神戸の文学を、「歴史を彩る文学」「神戸開港と西洋文化」「モダニズムと神戸」「神戸からはじまった」「ハイカラと港の文学」の五章で紹介し、作家の執筆環境や舞台となった地の歴史を記している。

読後、現地に足を運び、作家の執筆時の心境を顧みるのも、より感慨深いものとなるだろう。

消防士を救え！―災害救援者のための惨事ストレス対策講座　加藤寛（東京法令出版）

兵庫県こころのケアセンター副センター長である著者は、阪神・淡路大震災までは普通の精神科医であったが、震災後は被災者の心のケアに携わってきた。その間、従来の臨床では感じなかった疲労感・無力感をしばしば感じるようになり、救援する側の「惨事ストレス」による被災者との「共倒れ」のリスクを実感するようになる。

消防隊員を主として、震災や殉職事故・JR福知山事故などを例にあげ、職務を通じて経験した心の「傷」がトラウマとなる心身反応は、異常事態に対する正常反応であり、惨事ストレスは個人で解決するものではなく、組織が守ってゆかねばならぬものと提言する。

スギハラ・ダラー　手嶋龍一（新潮社）

テロリストの資金源を追う情報部員が、金融恐慌やテロの裏側で巨額の利益を得た者がいる、との情報をつかんだ。彼は捜査の末に、金融市場の大物アンドレイと相場師雷児にたどり着く。

アンドレイは杉原千畝の「命のビザ」に助けられた元ユダヤ難民で、脱出行の途中に立寄った神戸で雷児と知り合ったのだった。

果たして彼らがテロリストを操る黒幕なのか？

丹波竜―太古から未来へ　兵庫県立人と自然の博物館監修　神戸新聞総合出版センター編・発行

平成十八年の夏、丹波市山南町で大型草食恐竜の化石が発見された。「丹波竜」と名づけられた化石は、学術的価値の非常に高いものであった。

市民の発見から専門家による発掘のドキュメント、化石についての解説のほか、恐竜が生きた時代にもふれ、絶滅した恐竜の存在をも感じさせてくれる。

カラーページが多くコンパクトなガイドブックになっている。

＝その他の新刊＝

学徒出陣―戦争で特異な体験を強いられた高校生活　甲南学園同窓会編（甲南学園同窓会）

何が地方都市再生を阻むのか―ポートピア'81、阪神・淡路大震災、経済復興政策　藤本建夫（晃洋書房）

絆あの日から　山本れい子（文芸社）

訪ねてみよう神戸の遺跡　神戸市教育委員会文化財課編・発行

大震災15年と復興の備え　塩崎賢明ほか編（クリエイツかもがわ）

検証島尾敏雄の世界　島尾伸三・志村有弘編（勉誠出版）

書庫探訪　その㉑
『有馬山絵図』

これは、今からちょうど300年前、宝永7年（1710）の有馬温泉の地図です。

江戸時代は、印刷技術の発達にともない、国絵図や町絵図など数多くの地図が刊行されました。また、寺社や名所を訪れる観光目的の庶民の旅行が盛んになったことから、道中図や名所を描いた地図も作られました。古くからの名所である有馬も、多く描かれています。

この有馬山絵図は、現在残っている有馬の地図のなかでは、一番版年が古いものです。周りの山や集落は鳥瞰図風に、町並みは、測量図を基にしているようで正確に描かれています。右下には、有馬から大阪や京都、姫路への道程が記されています。

ランダム・ウォーク・イン・コウベ㊺

栗花落（つゆ）の井

奈良時代末のこと、八部郡の郡司、山田左衛門尉真勝（さねかつ）が奈良の都勤めの折、美しい姫に恋をしました。その姫は時の右大臣藤原豊成の次女で、中将姫の妹、美女の誉れ高い白滝姫でした。身分違いと知りながらも思いはつのり、とうとう真勝は歌を送ります。「水無月の稲葉の末もこかるるに山田に落よ白瀧の水」（身分の低い私ですが、どうぞこの恋をかなえてください）それに対する返事は「雲たにもかゝらぬ峯の白瀧をさのみな戀そ山田おのこよ」（手の届くはずのない私に思いを寄せないでください）という、つれないもの。この話を聞いた淳仁天皇は真勝を哀れみ、二人が結婚できるようにとりはからってやりました。そうして、真勝の思いはかなって、姫を故郷丹生山田の里へ連れ帰ったのでした。

しかし、幸せもつかの間。三年後、幼子を一人残し、姫は亡くなってしまいます。嘆きながら真勝は姫の魂をなぐさめるため屋敷内に祠を建て弁財天をまつり、その前に池を掘りました。それからは、毎年五月頃、栗の花の落ちる梅雨になると、清水が湧き出て、どんな日照りのときにも枯れることなく、田畑を潤しました。そしてその池にあやかって真勝は姓を「栗花落」に改め、この地の豪族として栄えたのでした。

これが霊泉、栗花落の井の伝説です。

「栗花落」は「梅雨」と同じです。

「水の湧出る間、長四尺餘、渡三尺、深一尺、常に無水而如平沙。梅雨に入て、必湧出す、其水口の数を以て、入梅の日を定む。」と、摂津最古の地誌『摂陽群談』には解説されています。

弁財天祠と栗花落の井

『摂津名所図会』には栗花落氏の邸宅が描かれており、邸内に「弁天」「つゆ井」の文字があります。平安時代末期、鳥羽上皇が摂津行幸の際、栗花落邸に立ち寄り「丹生の山のくるすの花は咲きにけりわきて流るゝ栗花落の井にして」と詠まれたことも記されています。（現在山田川に架かる幸座橋が行幸に由来すると言われています。）

兵庫口説（くどき）（江戸中期に流行した民謡の一種）の「山田の露」は「縁は不思議なものにてござる」で始まり「恋は日本天竺までも　貴き賤しき隔てはないぞ（略）愛しさかりの白滝様を理左が女房と名をつけ代えて連れて帰れと召し下さるる（略）今に不思議は湧き出る露の　今の世までも山田の殿と　なんぼう目出たのな　若松よさ」と、音頭に乗って広まっていきました。柳田国男は『桃太郎の誕生』にとりあげ、説話の変化を検証しています。山田の男が歌合戦により、身分違いの嫁取りをする話は「白滝姫と山田の奴」として群馬県桐生市にも伝わっています。

山田の里へ白滝姫がたどり着くまでの道筋にもいくつかの伝説が残っています。平野から石井川を渡り、里へ帰る途中、森で休憩を取りました。梅雨時でしたが、雨が降らず、村人が困っておりました。姫が手にしていた杖で地面を突き刺すと、なんと水が溢れ出しました。喜んだ村人はこの地に姫を祀り、栗花落の森（梅雨の森）と呼びました。そこには白滝姫腰掛石もあったそうです。それらの言い伝えから、都由乃町（兵庫区）という名前になりました。

更に夢野を通り鵯越を経て山道を進んで行く途中、都育ちの姫は不安と疲れで「行きたくない」と泣き暮れました。その涙の落ちた所が鵯越の高尾峠の「白滝姫なみだの井」だそうです。

栗花落氏の邸宅は何度か火災にあいましたが、この池は残りました。現在、山田町原野字札場、弁財天祠の床下にあります。平成十六年神戸市地域史跡名勝記念物にも認定され、今も保存会により大切に管理されています。また堂の裏には小さな塔があり、真勝の墓だと伝えられています。その塔のたたずまいは、まるで姫をひっそりと見守っているかのようです。

＊白滝姫の伝説は諸説あります。歌は『山田村郷土誌』から引用しました。

参考文献

「丹生の里だより」山田民俗文化保存会

『神戸の伝説散歩』田辺眞人　神戸新聞出版センター

『兵庫口説』村上省吾　弓立社

神戸市広報印刷物登録　平成22年度第141-1
（広報印刷物規格　B-1）